

ポーラ・J・ターナー著

インド出土のローマ貨幣

薙 勇 造

これは、インド各地より出土したローマ貨幣のうち4世紀前半のコンスタンティヌス1世時代までのものを、最新のデータに基づいて整理し多角的な考察を加えた書である。著者のターナー女史は、1984年にロンドン大学の考古学研究所に *Roman and Indigenous Coins in Central and Southern India in the First to Third Centuries AD* というタイトルの論文を提出して学位を取得後、出版業界で働くかわら研究を続けてきたという。本書はその学位論文の一部に補訂を施して刊行したものではないかと推察されるが、著者自身はこの点について何も述べていないし、筆者も論文そのものを見た訳ではないので確かなことは言えない。

ローマ帝政期の特に初期において、東方物産の大輸入超過を補うために大量のローマ貨幣が輸出された。2代皇帝ティベリウスの時代にこれが既に政治問題化していたことは、タキトゥスが伝える元老院宛ての帝の書簡(『年代記』III, 53)より窺えるし、プリニウスの「最も少なく見積っても、毎年インドとセレスとアラビア半島は1億セステルティウスを我が帝国から奪い去る。」(『博物誌』XII, xli, 84)とか、「どの年もインドが我が帝国より5千万セステルティウスを吸収して、我々の許で百倍に売られる商品を送り返さぬということがない。」(同上, VI, xxvi, 101)という有名な慨嘆の言葉は、ネロ帝の治下においてもなおローマの正貨流出の傾向が収まっていなかったことを物語る。ほぼ同時代に著された『エリュトラー海案内記』は、アラビアやインドの具体的な港の名を挙げて、そこにローマの金貨や銀貨が輸出されたことを記している。

近代に入って欧米人が東方進出すると、各地でローマ貨幣の出土が報告・記録されるようになった。殊にインドからの出土例が多い。出土と言っても考古学的発掘調査によるものではなく、偶然の機会に現地人が地中より掘出し、その後多くは市場に出回ったものである。ともあれ、ローマの東方交易の実態を知るうえで極めて重要な資料なので、正確で詳細なデータの組織的且つ総合的な整理と分析が望まれるところであるが、残念ながらこれまでこの要求は十分には充たされてこなかった。従来インド出土

のローマ貨幣に関して最もしばしば参照されてきたのは、R. E. M. Wheeler, “Roman Contact with India, Pakistan and Afghanistan”, in: W. F. Grimes (ed.), *Aspects of Archaeology in Britain and Beyond: Essays Presented to O. G. S. Crawford*, London, 1951, pp. 345-381 に Appendix (pp. 375-381) として掲載された “Roman Coins, Ist Century B.C. to IVth Century A.D., Found in India and Ceylon” と題するリストであった。これはその5年前にアリカメドゥ遺跡の発掘報告として出た R. E. M. Wheeler *et al.*, “Arikamedu: an Indo-Roman Trading Station on the East Coast of India”, *Ancient India*, 2, 1946, pp. 17-124 にやはり Appendix (pp. 116-121) として収録された同名のリスト⁽¹⁾が、不正確な箇所が多いものであったのを修正した改訂版であるが、なおいくつかの誤りを含むうえ、その後40年余りの間に新しい発見がなされていることを考えれば、当然のことながら現在では up-to-date とは言えぬものになってしまった。またウィーラー氏は時間的余裕のないことを理由に、貨幣資料全体の詳しい分析は行っていない⁽²⁾。1965年には P. L. Gupta, *Roman Coins from Andhra Pradesh* (Andhra Pradesh Government Museum Series No. 10), Hyderabad が出て、この中に著者のグプタ氏は、ウィーラー氏のそれに代わるべき新しいリストを掲載した (pp. 41-46)。筆者自身はこの書にはざっと目を通したにすぎず、貨幣のリストも精査していないが、ターナー女史が本書4頁に記しているところによれば、このリストには誤りが多いだけでなく、16もの出土例（そのうちのいくつかはウィーラー氏のリストにさえ既に収録済）が漏れているという。さらにグプタ氏は当然なすべき文献検索も、貨幣の所蔵状況を確認するための博物館の調査も殆ど行った形跡がないとして、ターナー女史はこの新リストの資料的価値をあまり高く評価せず、ウィーラー氏のそれに代わりうるものとは見做していない。その後1978年になると、大部の M. G. Raschke, “New Studies in Roman Commerce with the East”, in: H. Temporini (ed.), *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*, II. 9. 2, Berlin/New York, pp. 604-1378 が刊行され、その中で著者のラシュケ氏は、インド出土のローマ貨幣に関するいくつかの問題も検討したが (pp. 665-673)、十分な紙幅がないため詳細な議論はここでは不可能と断り (p. 665)、この点についてはいずれ専論を発表すると予告した (p. 604)。しかしターナー女史と同じく筆者も待望しているその論考は未だ現れていない。こうした中で、最初にも記したように up-to-date なリストを収録しているだけでなく、その資料の分析までも行った本書の出現は、実に歓迎すべきことである。以下にその内容を紹介し、簡単な批評を試みたい。

先ず本書の構成から見ていくと、本文は以下の5章から成っている。

- Ch. 1 Historical introduction
- Ch. 2 Analysis of the coin finds
- Ch. 3 The historical significance of Roman coins in India
- Ch. 4 Slashed coins and imitations
- Ch. 5 Conclusions

全部合わせても44頁で長いものではない。さらに、2～4章の末尾でそれぞれの章の要点を箇条書きにしたうえ、最後の章で全体をまとめるという形をとっているので、論旨は極めて明解である。

本文の後に以下のような70頁余りの付録が続く。

- I Catalogue of finds of Roman coins found in India
- II The present location of Roman coins found in India
- III Roman coins in the Madras Central Government Museum

このうちの最初のもので、本文における分析や考察の資料となっていて、我々にとって本文以上に価値のあるものと言ってよいかもしれない。そしてこの後に貨幣の発見地を記した3枚の地図と5種の表、それに貨幣のサンプルの写真 (Pl. I-VIII) が続き、最後に参考文献目録が掲げられている。

第1章の内容は、タイトルから予想されるような、ローマ貨幣が大量にインドへもたらされた事情の歴史的説明ではなく、インド出土のローマ貨幣の研究史概略である。1786年⁽³⁾に Andhra Pradesh の Nellore で、記録が残っている限りではインドで最初のローマ金貨の hoard が発見されて以来、現在までの約200年間になされた主な発見とそれらに関する研究が回顧され、その最後の部分で、上述のウィーラー、グプタ、ラシュケ氏等の業績の評価が簡潔に行われている。要するに、これら先人の仕事が不十分なところに、本書刊行の理由があるということであろう。

第2章では付録Iのカatalogをもとに、貨幣の発見地や鑄造年代等の分析が行われる。まず発見地の分布に関し、以前からよく知られている西南部の Coimbatore 地方の他に、Andhra Pradesh の Krishna 川沿いにも発見地の集中が認められるという。対照的に発見地の顕著に少ないのがインド北部とスリランカである。スリランカからは4～5世紀になるとローマ銅貨の模造品が大量に出土するが、本書の対象となっている時代には、島からも対岸の大陸側からもローマ貨幣は殆ど発見されていない。おそらくインドの西岸から東岸に行くのに危険な海路ではなく山越えの陸路がとられたせいであろうという通説に、ターナー女史も従っている。また『案内記』第49節にはバリユガザ（現在の Bharuch）にローマの金・銀貨が輸出

されると明記されているにもかかわらず、西北インドからの出土例の報告がない理由についても、女史は通説に従い、輸入されたローマ貨幣は現地通貨に改鑄されてしまったのでであろうと推測している。この点につき異論を唱えるのがラシュケ氏で、この地方の住民が植民地政府に極めて反抗的であった事情を考慮すると、そもそも英人による報告や記録が十分に行えなかったこともありうると述べているが（前掲論文665頁）、傾聴に値する意見と言えよう。

出土貨幣の鑄造年代の分布状況を見ると、共和政期に属するものが極めて少ないのに対し、帝政期、就中ユリウス・クラウディウス朝期のものが圧倒的に多く、著者も言うように、アウグストゥスと彼の後継者達の治下において東方交易が著しく発展したことを如実に示している。とは言え、ローマの共和政期と言えばエジプトはプトレマイオス朝の支配下に置かれていた時代であるから、この時期のローマ貨幣がインドからあまり発見されぬのも、当然と言えば当然ではなからうか。そしてそのプトレマイオス朝期の南海交易が決して軽視できぬことは、エジプトより出土するパピルス文書が明証するところである。著者自身も認めていることであるが、貨幣資料を通じて我々が知りうるのは交易史の一端にすぎぬということを銘記しておきたい。

著者によれば初期の大規模交易の特色は、各地の商人との取引にデーナール銀貨が多く使用された点であった。（もっともこれは、既に他の研究者によっても指摘されている。）しかしユリウス・クラウディウス朝期においても、やがて金貨の輸出が銀貨のそれに替るようになり、それとともに貨幣出土地の拡散も観察されるという。この章では他に、貨幣の多くが hoard の形で発見されることや、考古学的に発掘された遺跡からは殆ど出土しないことなどをもとに、輸入されたローマ貨幣は、現地の平常の経済活動において通貨として使用されていたとは考えられぬという、これも通説に従った見解が示されている。

次に第3章では、前章における分析を通じて出てきた諸問題について、歴史学的な説明が試みられる。まず共和政期の貨幣の出土例が少ない点について、前章の議論がより発展させられている。著者によれば、インドへの海上交通にモンスーンが利用され始めたのはアウグストゥス帝の初年からで、これによってインド西南部に大量のローマ貨幣が運ばれたのに対し、西北部より少数の出土が報告されている共和政期の貨幣は、内陸ルートを通じてもたらされたのであろうという。しかしモンスーンを利用するインド航路の発展が段階的であったこと⁽⁴⁾は通説となっていて、インド西南部への航路が開通するに先立って、西北部への航路がプトレマイオス朝

末期の前1世紀前半より使用されていた筈である。文献史料の記事を無視して、貨幣の出土状況のみを根拠に交易史を語るのは無謀ではあるまいか。

卑金属貨幣が欠如している理由は、ローマ世界で需要の高かったのは専ら高価な物産であったから、これを輸入するには金・銀貨でなければ用が足りなかったと説明される。

インド出土のデーナーリウス銀貨は、アウグストゥスとティベリウスという最初の2代の皇帝の、それも特定の二つのタイプのものに著しく偏っている。3代皇帝以降は金貨の出土例の方が多くなり、主要交易地域からの銀貨の出土が54/55年頃のものをも最後に途絶えてからは、専ら金貨の出土のみが報告されている。金貨の場合には、銀貨の場合のような特定のタイプへの極端な偏好は見られないという。問題の二つのタイプの銀貨が入手困難になったことが、インド側の需要を銀貨から金貨に変えさせた理由であろうというのが、ターナー女史の解釈である。この問題に関連して特記しておきたいのは、同女史が本書27頁で、先に触れた『エリュトゥラー海案内記』第49節の記事が、この書の著作年代を推定する一つの手懸りとなることを示唆している点である。即ち、ローマ銀貨のインドへの輸入が54/55年頃のものをも最後に途絶えたとするなら、バリユガザに金貨や銀貨が輸入されると記した『案内記』が、2世紀や3世紀に書かれた可能性は殆どないことになる。貨幣の鑄造年代とそれがインドに輸入された年代との間の多少のズレを認めたとしても、この書の成立年代を1世紀の後半より後に想定することは非常に難しい。

64年にネロ帝によって実施された貨幣改鑄（改悪）が対インド交易に与えた影響について、著者は、インド側は改鑄前の貨幣のみを要求したであろうという説⁶⁾には組していない。貨幣の改悪は帝国内における物価の高騰を招き、それはインド等からの輸入品の価格にも及んだであろうが、インド側にすれば、たとえ改鑄後の質の劣る貨幣であろうと、その分多くの金貨を入手すればそれで帳尻は合った筈だと言い、根拠となる数字をいくつか挙げて上の説に反論している。しかしネロのこの政策は別の形でインド出土の貨幣に影を投げかけているようで、次章でその点についての著者の考えが示される。なおこの章の最後では、2世紀に属する貨幣の出土状況をもとに、この時代にはコモリン岬を回ってインド東岸に達する航路が開かれていたであろうことや、交易範囲が着実に広がっていった反面、取引の規模は縮小していたらしいことが、簡単に述べられている。

第4章では、インド出土のローマ貨幣の hoard に顕著な二つの特徴——刻面の毀損と模造貨幣の鑄造——についての組織的な分析と考察が行わ

れる。それによれば、一般に考えられているより毀損の例は少ないようである。時代的に見ると、帝政初期の交易発展期に輸入され間もなく地中に埋蔵された銀貨が毀損を受けていないのに対し、それに続く時代の金貨の中に毀損されているものが見出される。但しその場合でも毀損を受けるのは、ネロの改鑄前の時代のものと、改鑄後では特に重量のあるものに限られるという。貨幣を毀損した理由はよくわからないが、ネロによる改鑄が引き金になったようである。改鑄前の良質の貨幣と、改鑄後でも特に重い貨幣を選んで刻面を傷つけたのは、それらが取引を通じて西方商人の手に還流するのを防ごうとしたためではあるまいかと著者は推測している。

ただ Akenpalle と Nasthullapur の hoard の場合は、少々事情が異なるようである。ここでは初期の時代に属する銀貨が毀損を受けているだけでなく、通常の毀損方法である切り込み (slashing) の他に、小さな丸い穴がパンチされている例が見られる。また模造貨幣も混じっている。著者の考えでは、例外的に早くから刻面の肖像に切り込みが入れられたのは、これらの土地が1世紀には、偶像崇拜を行わぬ Hinayana 仏教の中心であったことに関係があらうという。つまり宗教的理由を想定している訳である。しかしパンチ穴がつけられた理由については、果たして宗教的なものか経済的なものか不明と言っている。

模造貨幣の鑄造は、先にも記したようにインド側の需要が特定のタイプのものに偏っていたため、これに対応して行われたものと著者は考えている。なかなか精巧で、実証は出来ぬものの、輸入貨幣の中に既に西方起源の模造品が混じっていた可能性もあるという。

最終章では要点が改めて整理されて、全体の結論とされている。それをここで繰返す必要はないであろう。ただ一言付け加えておくべきと思われるのは、近年 Laccadive 諸島から報告された、どうやら古代の難破船に由来するらしい hoard と、Kerala 州から報告されている金貨の相当に大きな hoard が、詳細未確認という理由で、本書のデータには入っていない点である。しかしともに極めて重要な意味を持つ hoard のようで、それぞれの内容が明らかになった暁には、共和政期と2世紀について本書の記事は見直す必要が出てくるかもしれないと、著者自身がこの章の中で認めている。

付録 I には、インド全土より発見されたコンスタンティヌス1世時代までのローマ貨幣に関するデータが、発見地別に整理して挙げられている。アルファベット順に並べられた発見地の数は79で、それぞれの地理上の位置は、付録の後に置かれた地図の上に示してある。さらに付録 I の末尾でカタログにデータを挙げるに至らなかった、他の十数例の発見や報告への

言及がなされている。先にも記したように、この付録の資料的価値は高く、我々にとって本文以上に有用であると言っても決して過言ではなからう。付録のⅡとⅢについては特に言うべきことはない。

地図は3枚あるが、いずれにも貨幣発見地が示してあるだけで、本文やカタログの中に現れる州や河川・島などの名は記入してないので不便きわまりない。本書がインド研究者のみならず、ローマ史や東西交渉史の研究者も広く対象としている点への配慮が欠けているのが惜まれる。5枚の表には、カタログに挙げられた諸種のデータの要点を、さらに見易く整理してある。貨幣の写真は申し分なく鮮明で、本文の記述の理解を助けてくれる。参考文献リストも、古いものから最近のものまで重要な文献を網羅しているように思う。

以上、簡単な批評を交えつつ本書の内容を紹介し、特長と思われる点を指摘した。本文中に示されている著者の見解は、必ずしも著者の創見という訳ではなく、既に他の研究者によって唱えられていた説の確認である場合も少なくない。しかしその場合でも、先人が拠ったのより一層確かな資料を踏まえての発言だけに、信頼性において勝ると言えよう。またこれまでの研究には欠けていた、詳しく細かな分析が行われた結果、例えば銀貨の鑄造年代の分析から『エリュトゥラー海案内記』の著作年代の手懸りが得られたように、ローマの対インド交易やインドそのものの歴史を解明する上での、様々な示唆が与えられている。さらにカタログのデータを活用すれば、著者も気付かなかった視点からの分析も可能となるのではなからうか。

ただ、前イスラーム期の地中海世界とインド洋世界の交渉全体を問題にしようとする、本書の対象となった時代の前後の時代についてのデータも必要となる。プトレマイオス朝の貨幣はインドから殆ど出土しないそうであるが、ローマの共和政期のものは Laccadive 諸島の hoard にかなり含まれているらしいので、この hoard に関する詳しいデータが一日も早く公表されることを切望する。また4世紀以降ビザンツに至る時代については、記録や報告が不完全で、資料的価値のあるカタログ作りは難しいのであろう。しかしこの時代のインド洋交易に関しては文献史料も乏しく、そのことで日頃苦勞している筆者としては、ターナー女史には是非次の仕事として、この時期のデータの整理と刊行に取組んで欲しい。

註

- (1) 但しアリカメドゥ遺跡そのものからはローマ貨幣は出土していない。
- (2) Cf. “Roman Contact”, p. 361.
- (3) 本書1頁に「1796年」とあるのは、おそらく印刷ミスであろう。
- (4) 『博物誌』VI, xxvi, 96-106.
- (5) この説は、アウグストゥスとティベリウスの貨幣が多い理由をここに求めようとする。

東
洋
学
報

Paula J. Turner, *Roman Coins from India*. London (Institute of Archaeology [University of London] Occasional Publication No. 12, Royal Numismatic Society Special Publication No. 22), 1989. viii+152pp. incl. 8 plates.

第
七
十
四
卷

一
二
三